

母子領域支援者の TIC（トラウマインフォームドケア）研修の効果

武庫川女子大学 大岡 由佳 (006721)

キーワード：ひとり親、DV、トラウマ、居住支援

1. 研究目的

現在、シングルペアレンツの存在は増加し、決して珍しいことではなくなった。令和 3 年度の全国調査では母子世帯は 119 万世帯で、それら世帯の 8 割が離婚、1 割が未婚の母である。しかし、その背景に、配偶者からの DV やモラハラといったトラウマティックな状況がある。内閣府の調べでは 4 人に 1 人が身体的暴行、心理的攻撃、経済的圧迫、性的強要の 4 つの行為のいずれかを配偶者から受けているとされる。そもそも、不安定な環境の中で孤立し、中絶、若年妊娠の末、生活に困窮する女性も増えている。このようなトラウマを負い、生活にも苦慮する女性と子どもは少なくないが、それらへのサポートは十分ではなく、社会の眼差しも決してやさしいものではないことも多い。

そこで、シングルマザーらの居住支援を行う民間団体のスタッフらを対象に、トラウマインフォームドケアのオンライン研修を 10 か月にわたって行い、その研修参加者に、トラウマインフォームドケアの認識についての研修前と研修後のアンケートをオンラインにて実施した。その結果から、現在の日本のシングルペアレンツのトラウマの実態を知り、同時に、対人援助職らのトラウマインフォームドケアに対する認識の現状と研修の効果を明らかにすることにした。

なお、トラウマインフォームドケアとは「トラウマの影響を理解し対応することに基づき、サバイバーや支援者の、身体・心理・情緒の安全性に重きを置き、サバイバーが、コントロール感とエンパワメント感を回復する契機を生みだすストレングスに基づいた枠組み」(Hopper,Bassuk,Olivet,2010)」を指す。近年、北米・欧州では、その概念の応用と実践が、児童分野をはじめ精神科医療、司法、ホームレス支援、女性支援の分野等において盛んになりつつある。

2. 研究の視点および方法

(目的) TIC 研修によって、トラウマインフォームドケアな認識や、日々接しているクライアントへの視点や態度、所属する組織に対する認知の変化が起こるかについて明らかにすることを目的に実施した。

(調査対象者) 都内を中心としたひとり親の居住支援を行う 5 団体およびそれらの関連団体のスタッフを対象とした。それら団体の代表者からの研究受講の依頼に対し、研修を受講し、その後アンケート協力した者が対象であった。

(研修概要) 研修は、TIC 総論として「さまざまなトラウマ」「トラウマの影響」「トラウマからの回復」「トラウマへの周囲の関わり」「支援者のトラウマ」を取り上げた。頻度は、偶数月オンラインにて TIC の総論の話を 5 回、また奇数月対面（ハイブリッド）で TIC

の各論講義と事例検討を4回実施した。対象団体のスタッフが参加しやすい時間帯を考慮し、いずれも土曜日1時間半の時間を確保し開催した。

トラウマインフォームドケア（TIC）に関するオンライン/対面研修受講の前と、研修全行程終了後の10か月後に、対象者に回答をしてもった。Google Formを使用し、「研究へのご協力をお願い」とともに、アンケートを研修受講後にオンライン上で案内した。研修前後のデータを連結するために、個人を特定するためにメールアドレスと氏名（ニックネーム含む）の情報を収集した。

調査項目は、性別、年代、支援期間、資格有無、トラウマを有するであろう対象者への接触機会の程度、TIC研修受講有無、現在の困りごと等を尋ねた。加えて、専門職のQOL尺度（ProQOL）、TIC尺度（ARTIC）の既存の尺度を用いた。結果の分析は、エクセルおよびIBM SPSS（Statistics26）を利用した。

3. 倫理的配慮

本調査は、武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科／心理・社会福祉学部社会福祉学科研究倫理審査委員会規定に従い、研究倫理審査で承認され実施された。本報告に関連して開示すべきCOI関係にある企業等はない。

4. 研究結果

調査前に回答に応じた者は計99名で、男性13名(13.1%)、女性79名(79.8%)、その他・回答しない7名(7.1%)であった。資格についてであるが、保健医療福祉専門職36名（医師3名・看護師/助産師/保健師16名、公認心理士/認定心理師9名、社会福祉士/精神保健福祉士8名）、教育関係専門職8名（教員4名、保育士4名）、その他専門職19名（思春期保健相談士、児童指導員、キャリアコンサルタント、社労士など）、資格なし36名であった。研修受講前に、現在の困りごとをあげてもらった。若年妊娠をした女性や、子どもを抱えてひとり親となっている者に接する中で、どうサポートや対応を行うことがよいかを困っている者が多く存在した。

すべての研修終了後に調査に応じた者は27名の研修前後の尺度の結果を測った。研修受講前から共感性疲労が高い状況にあった。ARTICについては、研修前後で、有意に下がっていた。研修受講後の感想としては、「他者と接する時の自分の心の持ちようが変わったと思います.」、「仕事だけでなく日常生活で出会う人々にも優しく接する事ができるように変化した.」といった感想があった。

5. 考察

シングルマザーの居住支援現場の実際が明らかになったが、大変トラウマが多い現場であり、それによって支援者が二次受傷を受けやすい状況が確認できた。そもそも研修前より二次受傷のリスクが高い状況にもあった。また、それらの支援者へのTIC研修は有効であったことから、母子領域の支援者へのTICの研修を更に導入していくことが明らかになった。